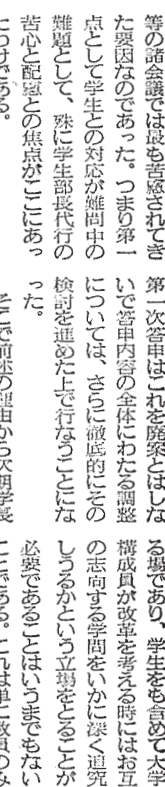


津田 昌利



等の諸会議では、苦慮されてきた要因なのであった。つまり第一点として学生との対応が難問中の難題として、殊に学生部長代行の苦心と配慮との焦点がここにあった。

第二次答申はこれを廃案とはしない場であり、学生をも含めて大学構成員が改革を考える時にはお互いの志向する学問をいかに深く追究しうるかという立場をきくことが必要であるといふまでもない。

また前本の理由から、文理系と工学系との垣根を打破し、教員のみならず、学生も互に学問の境を越えて、

改革準備委員会の第一次審申の取扱いのいかんが学長強硬に直接にかかってくる重要因子となってきた。次に第一号としてこの第一次審申に対する各学部教授会（広

選挙については第一次審申の検討とは別途にこれを実施することにわたつたわけである。この新しい暫定方式の特色としては学長候補選挙委員会の委員として専務職員

ならす学生の立場もまた同様であるであつた。そして学究すること

を棄てた大学改革はあり得ないし、あくまで学問しながらの大学改革であるといふよう。同時にそれ

いわゆる大学問題が社会的課題の焦点となつてからすでに久しい。

それは大學紛争というきびしいに直面する必要があると思つたか
嵐を随伴して私どもの視野一面を
らである。

占めたような時期もあった。こうした情勢の中で大学改革という問題が必然的に発生し、その当時から今もなお大学改革をおこなおうとする大学としての意欲、一部の改革を段階的に実施しようとした大学など各大学ともにそれぞれの思考と観点から大学改革に対していろいろな現在的情勢であ

いわゆる中谷孝素案、明石学長事務代行所見、四学部改革案、改革準備委員会による第一次答申等、さらに広瀬学長代行就任の所見など、そのどれをみても学長選挙に關しては学生不在とはならぬこと、つまり何らかの形で学生の参加が考慮されようとしてきた。前述の引例の中にはむしろ公約さ

「暫定措置」に全員一致の意見

始しているといいきるとは過言であるだろうか。私はそれら改革案の入手し得たものに対して、いささかではあるが自分なりに勉強させて貰ってきたのであるが、それである。

「暫定措置」

の中は流行のバスに乗りおくれまいとする改革の名をかりた改革と受取られるようなものすら散見されたこともある。

改革準備委員会から広瀬学長代行のもとに第一次審判が提出され、これをうけてたまた学長代行がそれぞれの機関に適当と思料さ

その大学独自の個性的と呼ぼつた特徴あるものは比較的少ないように思われるのである。特に私学としては、大学改革にめざす姿勢が、その私学独自の映像が、さげたいと思う。

難航した意見調整

し、改選のころにはそんなに忙し
やかなものでなくともいように
考えられるのである。つまり地味
であっても実施されうることを一
部つつでも実施可能な方向づけを
する。

してゆくと考えるのは、自分が自然科学系の人間であるからなのであろうか。工科系では思索と実験とが相伴なうのを常とするからである。

ひるがえって学生自治組織を展望すると大学1年生や第二部学生には組織が存在しているが、学生層の大半を占める第一部学生の自治組織は完全に成立していないとみ

与えられた表題にやや離れた書き出しとなつてしまつたのは、本学には従来から学長推薦に因する代行をはじめとして六学部長代行

これらを核として展開させていかなくては第 次答申の取扱いの手段に節度がつかないと判断されたのである。そこで第六十四回学部長会議でこのための調整会議なるものが提案され、これを了とした結果、その後三度回にわたる調整会議がもたれたわけである。これは学 部長代行、大学院部 課長が作製された。これが第七十

職員にも参加

部長等で構成された学長諮問機関である。会議は数回におよび、結果として第四回調整会議で全構成員の一致をもって決定し、これを各学部教授会に付議される運びとなった。

がその過程において断絶の危機に
たつた。たとえ二期学長選挙が予定措置
としてはいえなくとも、たつたことは
大学自治といへば本質的に大體
尊重されていふとする眞理の

一現夢であつて、實に真劍にして
一現夢ともみられるのである。九

事實である。そして学長代行の決断と全員の賛成の結果がこの成立をみたことを特に記しておきたい。このように八月五日第四回綱整会議において漸く調整が成立し、
月五日、学長代行によって補欠された選挙管理委員会では池田次学長代行が委員長に選出され、次期学長選挙実施への準備を回転を開始した。この日程によれば九月二十七日の選挙会で当選した学長

最終的に六学部部長代行および事務職員会議長の意見を待て決定をみたわけであった。こうして既に候補者を六学部教授会の承認を理事会の諮問にこたえる調ひとなっている。

学問しながら

の大学改革を
すなわち改革準備委員会による
の陣痛期は可成りの日時を必要と
してきた。

夏期休暇も終り、
 厳しい残暑のなかに
 また授業開始を迎え
 た。様々の話題をま
 いた万国博も、いよ

平穏を取戻した今日
そろそろお祭り気分から抜け出し、
灯火に親しみたいものだ。▼

キャンパスも活気を帯びてきた。今回の選挙から、学生・事務職員も含めた大学全構成員が参加する道

が開かれた。これは暫定規程によ

歩として画期的なところといえる。全面的な改革案の作成・実施には、なおかなりの日時を要するであろうが、今回の学長選挙が二つのテスト・ケースとして、真剣に検討されることを期待したい。

▼ところで、よく「日本人はイエス・マンだ」とか、何事も「仰せ

「いっとい」で批判的精神に欠ける、とかいわれてきた。だが、昨今の風潮ではむしろ180度回転し、「反対」「否定」「告発」「解体」など、むやみにノを振回す嫌いがある。一つの理論、一つの制度を否定するとは比較的易しい。問題は、それに代る新たな神

論ないしは制度をいかにして打ち立てるかにある。▼一例を挙げよう。近時、マスコミでは公害問題

かにながにクロースアップされた。人
に。至った。人間の生命にもかかわ
る問題だけに、その重要性はいかに
も強調しても強調しすぎることはな
い。だが、「くたばればよい」

NP」に象徴されるように、それ

が経済の高成長自体の否定にまで進むとしても、問題の真の解決に近づくものではあるまい。公害なき成長の達成、これこそ今後のわが国経済に与えられた、最も重要な課題である。

かつ困難な使命といえよう。▼大学改革についても同様である。要はすべての大学人が改革への熱意を失うことなく、創意と努力を傾

けて 一歩一歩改善への歩みを奏
 実に進めることではなればなる幸
 い。
 (Y)

